



大王のひつぎを運ぶ実験航海

現在、全国的な注目を集めている馬門石。宇土を舞台にした日本古代史上の謎に皆さんも挑んでみませんか。

第1部 プロlogue

第四回 石棺の原石を求めて

大王のひつぎ実験航海事業で、注目を集める馬門石の石切場跡。実はつい最近まで、地元の人達の記憶からも忘れ去られようとしていた「過去の遺産」だったのです。

馬門石の採掘の歴史

1500年前の古墳時代、おそらく馬門地区周辺では2〜3mを超える巨石(転石)がゴロゴロしていて、その巨石を使って石棺が造られていたと考えられています。その



石切場から採掘された石棺の原石

後、鎌倉時代や室町時代に五輪塔などの石造物、江戸時代になると水道管や井戸枠、石橋などの多くの製品が造られ、山の形が変わるほど大量に切り出されました。

しかし、昭和30年代以降、コンクリートの急速な普及によつて馬門石の需要は減り、ほとんど採掘が行われなくなりました。40年以上経過した現在、放置された石切場は人を寄せ付けない深い森になり、往時の姿を全くとどめていません。

困難を極めた原石の採掘

今年3月、森林と化した石切場から復元する石棺の原石探しが始まりました。ところが、多くの石にヒビ割れが走り、※約2.5mの大きさの石棺に使える巨石はなかなか見つかりません。作業は困難を極め、全くメドが立たないま



古墳時代の石材採取

ま2ヶ月が過ぎようとしていました。「本当にひつぎの石は採れるのだろうか・・・」採掘にあたった清田新一さん(網津町)の焦りと疲労はピークに達しました。

このような苦労の末に、5月中旬、ついに蓋と身になる2つの巨石の採掘に成功しました。彫刻家の高濱英俊さんが製作し、7月に完成した石棺の原石は、このような労苦の果てに発見された「宝の石」だったのです。今回は「継体大王のひつぎを復元」です。※継体大王が眠る今城塚古墳(大阪府高槻市)から見つかった馬門石製の石棺がモデル。

馬門石県民遺産保全活用事業

Public Art Sculpture Symposium in Uto 2004

10月3日まで開催中

創作拠点
つつじヶ丘 農村公園 特設彫刻広場

クリスティーン
メイティス
(フランス)



本田 貴信 (日本)



世界の彫刻家が『馬門石』で新たな造形メッセージ

馬門石は1600年前から近年に至るまで、人々の生活の中に密着し、利用されてきた歴史的経緯を持っています。「パブリック・アート・スカルプチャー・シンポジウム」はロマンをかきたてる馬門石に現代彫刻をもって歴史のベールを開き、永遠に消えることのない造形のメッセージを発信するものです。

昨年宇土マリナーで行われたアーティスト・イン・レジデンスに引き続き、歴史的遺産「馬門石」で芸術文化の振興と国際交流を図ります。皆さんも馬門石がもつ歴史に触れるとともに、世界と宇土が融合し、創り出す芸術を感じてください。



オープニングセレモニー
(9月5日)